TUFS 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化[1]

富盛伸夫、YI Yeong-il

1. はじめに

ヨーロッパ連合（European Union、以下 EU）は統合への中・長期的な道程において一連の教育改革を政策化したが、そのなかでも象徴的位置づけにあるのが「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment、以下 CEFR）である[2]。2001 年に言語能力評価のための参照枠組みとして欧州評議会から正式に公布されて以来、CEFR は EU の言語教育の現場に大きく影響を及ぼしてきた。約 15 年を経た現在、ボローニャ・プロセス[3]の進行とともに高等教育の質保証と認証基準の流れが急速に標準化しつつあるなかで、CEFR の適用は欧州地域から世界各地へと拡大しつつある。

本稿第一執筆者を代表とする共同研究[4]ではこれまでに EU およびアジア諸国で現地調査を行った結果、CEFR が実践される過程で、根底にある理念と現場での受け入れ方には認識上のずれがあるのではないか、という疑問が生まれている。Byram; Parmenter（2012）は日本語やアジア諸語での調査報告を受けて、CEFR が言語能力を評価するための簡便な測定尺度として利用される傾向があることを危惧している。現在日本の英語教育を中心とする領域で CEFR 導入が進められているが、従来の Can-do-Satements に代わる汎用測定方法としての活用が強調されるあまり、CEFR の本来

---

[1] 科学研究費助成事業基盤研究(B) [50122643] 2015-2017 年度「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」（研究代表者富盛伸夫）による研究成果として外国語教育学会で発表し、本紀要で公開するものである。

[2] Council of Europe (2001)を参照。

[3] 富盛伸夫 (2009)を参照。

[4] 本稿に関わる共同研究は、先行する以下の科学研究費研究プロジェクトで遂行された。
科学研究費助成事業基盤研究(B) 2012-2014 年度「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」（研究代表者富盛伸夫）。
科学研究費補助金基盤研究(B) 2009-2011 年度「EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」（研究代表者富盛伸夫）。
科学研究費補助金基盤研究(B)2006-2008 年度「拡大 EU 諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」（研究代表者富盛伸夫）。

*****

本稿は、2016（平成 28）年 12 月 18 日に開催された外国語教育学会（JAFLE）第 20 回研究報告大会において、富盛伸夫と YI Yeong-il が行った口頭発表をもとに、外国語教育学会紀要『外国語教育研究』No.20 (2017) pp.207-217. に掲載された研究ノートを転載しているのでレイアウトはオリジナルのままである。

持っている言語教育上の意義が見失われる可能性を否定できない。

後述のように、折しも近年 EU 自体が CEFR の部分的(しかし、本質に関わる)見直しを進めつつある。これと軌を一にして我々の研究では、とりわけ非 EU 諸国、特にアジア諸国での CEFR 受容に際して、多様な言語・社会・文化的特質を勘案した新たな能力評価記述文策定のための指標化を試みる段階に至っている。次章以降では、我々の収集する基礎的資料の分析を通して、アジア諸語により有効な能力評価指標の開発への試みを紹介する。

2. 本研究の範囲と方法

本研究は、EU という比較的均質的な言語・文化的土壌に育った CEFR の測定枠組みが、アジア諸語を学ぶ学習者にとって有効かどうか、という問いかけに動機付けられており、その問題設定は、以下のとおりである。

(1) CEFR が、EU 域内の諸言語と言語類型的特徴が異なる言語に適用範囲を拡大するとき、どのような問題が生じるのか？

(2) 非 EU 言語地域には多様な社会的・文化的特質をもつ言語習慣があることを考慮するならば、CEFR の適用に際してどのような要素を考慮すべきか？

我々の先行研究では、以下 3 つの段階的検証作業に分けてきた。

(A) 「定量的分析(Quantitative Analysis)」: 2014 年秋に東京外国語大学学生を対象に CEFR に準拠した自己評価アンケート調査 (1476 回答) を実施し、特に類型的特徴の異なるアジア諸語を含む 24 言語の学習進度との相関を分析して CEFR の通言語的有効性を検証した。ここから得られた重要な示唆として、アジア諸語でのコミュニケーション遂行能力の獲得には、社会・文化的特質の関与度が大きく、コンテンツやコンテクストの分析には、M. K. Halliday ら[5]機能言語学者たちの提案する理論的枠組みを考慮に入れることの意義が確認された[6]。

(B) 「直感的分析(Intuitive Analysis)」: 言語学習者(学生)からの直接の意見聴取を行う記述式調査を上と同時期に行い、言語類型の異なりや社会・文化的特質の差異に起因する能力測定の問題点について貴重な示唆を得た。

---

[5] Halliday, M.A.K.; Ruqaiya Hasan (1885) を参照。

[6] 詳細は、富盛伸夫, YI Yeong-il (2016) を参照。

CEFR をアジア諸語教育に援用するためには、アジア諸語圏の社会内人間関係の言語的反映（敬語や丁寧体を含む待遇表現、性差等）や顕在的、潜在的な社会序列の反映、商慣習におけるストラテジックな言語行動など、EU 世界と異なる「社会・文化的多様性」を考慮した能力記述項目を加えるべきであろう、という認識に達した。

(C)「定性的分析（Qualitative Analysis）」:その上で、アジア諸語圏の社会・文化的コミュニケーションに関わる特質を踏まえた能力記述項目についてのコメントを言語教育担当教員から収集し総合的に分析する。

以上の分析工程を踏まえ、本稿では、主に(C)「定性的分析」の作業を通して考察を進める。

3. 社会・文化的コミュニケーション能力測定指標の抽出と評価

本章では、我々の研究グループの分担者（計 14 名）のうち、主にアジア諸語の教育現場を持つ言語教員の支援を得て、社会・文化的コミュニケーション能力が反映する指標の検討を行う。以下、アジア諸語に特有なものと予想される社会・文化的言語コミュニケーションの要素をコーパスから抽出し、次に、それらの要素が言語教育現場で能力レベル測定の指標として活用できるかを評価し、第三に、アジア諸語に適切に CEFR を適用するための改善案を考察する。

3.1. 利用するコーパスの選定

第一に、アジア諸語の特質と思える社会・文化的要素の抽出には、できる限り実際の言語使用の裏付けがある会話文コーパスの利用が望ましいが、オープンソースとして活用できる電子的コーパス・データや市販の語学書は言語ごとに多種多様で、対照に適した素材は入手できない。そこで本研究のための基礎データとして使用したのは、東京外国語大学が 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学研究拠点」の成果物としてインターネット上に公開している『TUFS 言語モジュール』[7]の

[7] 東京外国語大学のトップページから『TUFS 言語モジュール』の閲覧と利用が可能になっている。（http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/） これは 2003 年以来現在まで精力的に開発と公開が続いているオンライン言語学習プログラムで、「会話モジュール」の対話文には音声つきの動画が提示され、場面や背景の情報を補っている。管理にあたっている梅野毅氏によれば、東京外国語大学の学生のみならず、一般社会人と想定される閲覧者、地域的には全世界からのアクセスが顕著で月間ページビュー数が常時 250 万を超える利用数があるということである。

「会話モジュール」と呼ばれる部分である。

本研究にこれを利用する最大のメリットは、通言語的観点から 26 言語の教材としての組み立てが同じ骨格でなされ、個々の言語の特質を言語対照的に把握できるようになっていることである。27 言語に共通な 40 の「機能的場面」(01.挨拶する、02.感謝する、03.注意をひく、04.自己紹介する、05.謝る、06.人にものをあげる、など)が設定され、発話の状況・発話場面・発話意図が明確で、かつ、対話者の人間関係・社会的位置が明確に読み取れる。そして、一連の対話文の流れに語用論的・方略的(strategic)組み立てがなされていることが核心的重要性を持っている。

『TUFS 言語モジュール』の開発に携わったひとりである結城(2004)によれば、「会話モジュール」構想には機能主義的コミュニケーション遂行の研究が根底にあったようである。とりわけ「説得」「承認」「評価」などの機能範疇が設定され,「文法的に正しい」ことよりも、話者の発話目的に合致させ、対話者間の人間関係や社会役割にも配慮し、かつ話題・場面・コンテクストに適切な言語的、非言語的行動をとる能力を優先している。この設計思想が CEFR の理念に通底することは言うまでもない。

開発スタッフの結城らは、「会話モジュール」に含められる 40 のコミュニケーション機能を設定し、26 言語の会話内容の設計を行った。彼らはこの視点から当然、言語間には社会的慣習や文化的価値体系の差異があることも認識しており、それは文法規範の問題であるよりも、言語使用の適切さの問題である。要約すれば、言語使用の社会・文化的トリガーは、各言語が背景に持つ文化的、政治的、経済的な要因により特徴的な場面・機能に深く依存する、という立場であり、この姿勢は Halliday (1885) らの選択体系機能理論(Systemic Functional Theory)からの解析を参照する我々の関心とも共通している。

結論として、発話に関与する要素に加えて語用論的要素を考慮に入れた「アジア諸語の社会・文化的指標の抽出」という目的の作業においては、『TUFS 言語モジュール』に含まれる「会話モジュール」に利用の意義があると判断した[8]。

3.2. 発話の機能要素の抽出とタグ付け

『TUFS 言語モジュール』を基礎資料として利用するため、インターネットに公開されている『TUFS 言語モジュール』のサイトから、日本語、朝鮮語、中国語(普通語)、中

---

[8] 『TUFS 言語モジュール』にはオンライン教材という制約があることや、場面が網羅的ではないこと、対話のコンテクスト量(各言語平均450文)の不十分な点などに留意する必要がある。

国語（北京の普通語）、中国語（蘇州の普通語）、中国語（台湾の普通語）、モンゴル語、フィリピン語、ベトナム語、マレーシア語、インドネシア語、カンボジア語、ラオス語、タイ語、ビルマ語、ベンガル語、ヒンディー語、ウルドゥー語、ペルシア語、トルコ語、アラビア語の 21 言語（地域語を含む）を取り上げた。調査者は各言語の平均 40 場面の会話文を動画とともに観察し、母語・母文化と異なる学習対象言語を学ぶ初学者の立場に可能な限り身をおいて社会・文化的特質の濃く読み取れるシークエンスを精査して、各言語平均して約 450 行（40 場面）をエクセル表に入力し、各行に対して計 13 列（カラム）を設定して、場面のタイトル、状況、場所、属性、性別、人間関係、登場者名、発話者記号、発話番号、本文、日本語翻訳文を配列し、続く右の列には必要に応じて社会・文化的特性に関わる我々のコメントを記した。

次に、以上の準備的作業から EU 地域の社会・文化的特質から距離があると思われるコミュニケーション機能の構成要素（22 項目）を取り出した。すなわち、商取引の際の交渉（その土地の慣習に適した語用論的ストラテジー、など）、個人間の人間関係に相関する話題選択（年齢、住所、出身地、収入、趣味、週末の行動、など）、社会的関係に相関して変化するレジスターの使い分け（敬語・謙譲表現、性差文体、相手に適切な称号を使う、など）、文体スイッチング（話し言葉と書き言葉の文体差、待遇表現を含む時候の挨拶、はがき・カードなどの文体を適切に選べる、など）のコミュニケーション機能要素を抽出した。これらが言語・文化間コミュニケーション能力の測定指標として適用が妥当かどうかを調査した中間まとめを以下に報告する。

3.3. アジア諸語担当言語教員へのアンケートの中間まとめ

今回の定性的分析の工程において、本科研の分担者および協力者を中心に現場でアジア諸語教育にあたっている教員の支援により、2016 年秋に直接の聞き取り調査と記入式回答の収集を行った。前節に略述した社会・文化的コミュニケーション機能をもつ要素について、対象言語の教育において教材や教授内容に反映するかどうか、CEFR 的能力測定尺度を想定する場合に記述項目（descriptors）として加えることが妥当かどうか、その想定レベルは何か、などを質問した。現在までに取りまとめられている回答の言語は、朝鮮語・ベトナム語・マレーシア語・カンボジア語・ビルマ語・ベンガル語・ペルシア語・日本語で、以下にケーススタディーとして取り上げたのは、そのうちの一部分である。

ケース・スタディ 1:「商業的取引でストラテジーが関与する言語行動」

表 1 の調査回答のまとめにあるように、値札販売をするデパート、スーパーなどの店舗は別として、値段・品数交渉が原則であるのが一般的で値札やタクシー・メーターの表示がないところもアジアでは多い。値段を尋ねる言語能力は数量詞、通貨単位の表現などの語彙や疑問文や返答に必要な形態・統語論的規則の習得が前提であるが、言語的な難易度は高くなく、CEFR のレベル設定で A1 レベルのタスクとみなしてもよいだろう。しかし、値段を尋ねる疑問文を作ることができても、物品を売り手の言い値で購入する行動が適切かどうかには議論の余地がある。アジア諸国の店頭での商取引においては、定価販売とは異なり、値段や数量の交渉も不可欠な言語行為である。「値段を

言語行動 / 言語名	機能ジャンル:商業的取引でストラテジーが関与する言語行動	
	商品の値引きなど交渉する	商品の代替品や品数を交渉する
朝鮮語	B1 妥当:普通に行う。デパートや量販店など定価販売の店では行わない。	B1 妥当:普通に行う。
ベトナム語	妥当:普通に行う。全レベルで必要。	妥当:普通に行う。全レベルで必要。
マレーシア語	B1 妥当:伝統的市場では普通に行う。徐々にそういう場面はなくなっている。	B1 妥当:伝統的市場では普通に行う。徐々にそういう場面はなくなっている。
カンボジア語	妥当:なじみのない店や価格表示がない店などで行う。正当な価格であると思えば行わない。買う気持ちがないのに、値段だけをきいて情報収集してはいけない。一度値段をきいたら交渉しなくてはいけない。	妥当:なじみのない店や価格表示がない店などで行う。正当な価格であると思えば行わない。
ビルマ語	B1-B2妥当:個人営業の場合。ただしスーパーなど、値札がある場合は行わない。タクシーではメーターがないので値段交渉する。	普通に行う。場合によって異なる。
ベンガル語	A1 妥当:普通に行う。	A1 妥当:普通に行う。
ペルシア語	A2妥当:バーザールなどでは,値引きの交渉は普通に行うが、以前に比べると少なくなる傾向にある。	A2妥当:バーザールなどでは,値引きの交渉は普通に行うが、以前に比べると少なくなる傾向にある。
日本語	B1 妥当:値段交渉が普通の場面(フリマ、秋葉原の電気店など)では妥当。しかしそのような交渉がない場面(日本のデパートなど)では妥当ではない。つまり、場面に応じて使用・不使用を使い分けられることが重要。	B1 妥当:フリマ、電気店などでは数量の交渉も多い。ビジネス日本語ではあり得るが、一般的ではない。
能力記述項目への妥当性(まとめ)	該当する言語では、妥当。該当しなければ入れなくともよい	該当する言語では、妥当。該当しなければ入れなくともよい
CEFR レベルの難易度:A1〜C2(まとめ)	A1, A2, B1, B2	A1, A2, B1
Descriptors(案)	「店の種類や商品により、値段を訊いて、希望であれば、値引きの交渉を行うことができる」	「店の種類により、商品の値段を訊いた上で、他の商品や品数の交渉を行うことができる」

表1　商業的取引でストラテジーが関与する言語行動

訊いて買う」という言語能力には、単に値段を訊いて買うか買わないかを答える A1 的能力から、数段上の言語的・語用論的能力まで、かなりの幅を設定せねばならないかもしれない。学習者は現地での生活を視野に入れれば、初習段階からこのような社会・文化的言語能力を身につけねばならないだろう。

実際、『TUFS 言語モジュール』の会話モジュールには「数字についてたずねる」「金額についてたずねる」という機能シラバスがあり、多くの言語では店頭での買物行動を場面として提示している。ベンガル語の会話例では、「（客）それの値段はいくらですか？」「（店員）6 千タカですよ、おねえさん。」「（客）高すぎるんじゃないかしら。2 つ買ったら少し安くしてくれますか？」「（店員）いえ、いえ、おねえさん。高くはありませんよ。…分かりましたよ。では 1 万タカ払ってください。」「（客）いいでしょう。ではその 2 つをください。」といった語用論的ストラテジーを使用したやりとりがある。売買の場面や自分の希望に即して、効果的な表現で適正な価格で買えることは、CEFR のいう行動中心主義の言語能力に必須の要件であり、«言語表現と共に語用論的駆け引き行動を適切に行えるかどうか»が言語使用能力に含まれる、と考えたい。

表 1 に見る通り CEFR レベルについての回答は A1～B2 の幅があり、場面・状況や言語・文化ごとに難易度が異なることには留意する必要がある。加えて、その土地の商習慣に適した表現、値段や数量の交渉、妥協、支払いの方法に関する予備知識（一種の「世界知識」）も必須要件である。カンボジア語欄の回答にあるように、「なじみのない店や価格表示がない店などで行う。正当な価格であると思えば行わない。買う気持ちがないのに、値段だけをきいて情報収集してはいけない。一度値段をきいたら交渉しなくてはいけない」のである。ここから示唆されるのは、商取引の言語的タスクの解決能力は、単に語彙・文法構造などの知識の問題ではなく、社会的慣習あるいは文化的規範を学習するとともに、与えられたコンテクストのなかでどの程度まで応用し適切な行動ができるかを測る能力が問われているのである。もっとも、ヨーロッパを含め、露天市場やフリーマーケットなどでは価格交渉がごく普通であるが、現在の CEFR では上の語用論的タスクは特に重視されていないことも留意しておく。

ケース・スタディ 2:「社会関係が反映する文体、待遇表現・謙遜表現」

特定言語地域の人間関係、特に社会関係を学習者が把握しておかなければ、円滑なコミュニケーションに支障をきたす場合がある。表 2 で調査結果の一部分を抜粋してまとめたが、多くのアジア諸地域では社会的慣習あるいは文化的規範を理解し、与えられたコンテクストのなかで待遇表現などを応用し適切な行動ができる能力が問われ

る。対話者間の関係により、個人的領域に踏み込むかどうかの判断は、様々な社会的要因が関与していて程度の線引きが困難であるとの回答があった。また、年齢や出身地、現住所、嗜好など、個人的な親しさを増したり深い人間関係構築のために尋ねる場合もある。この点はまさに、文化的感性のかかわる問題であろう。

対話のシークエンスのなかで社会的関係がはっきりしたら、それに対応した待遇（そして謙譲）表現、適切な呼称を用いるコードにスイッチングする。このような社会・文化的パラメーターを含む言語コミュニケーション能力のレベルは B2 まで要求される言語もあることがわかった。招待や物品のやりもらい、プレゼントの授受については、欧米地域に多い「これはあなたへのプレゼントです」型に対して日本語のように「つまらないものですが、お気に召さないかもしれませんが、よろしければどうぞ」の類の謙遜表現の使用は、相手との関係や状況を考慮して不快でない表現でプレゼントを渡せる語用論的能力である。

言語行動 / 言語名	機能ジャンル：社会関係が反映する文体、待遇表現・謙遜表現				
	年齢差や社会的地位に応じて待遇表現を使う	自分のことや持ち物、食事などの招待時に謙遜表現を使う	男女差と文体・語彙の差	書き言葉と話し言葉との差	時候の挨拶文などで特殊な文章表現
朝鮮語	A1 妥当：普通に行う。ただし、親しい人間関係（母と娘、兄弟、友人、恋人同士など）のプライベートな場面では行わない。	A1 妥当：普通に行う。出した食事を過小評価気味に言うなど。ただし、親しい人間関係（母と娘、兄弟、友人、恋人同士など）のプライベートな場面では行わない。	使わない。親しい若者同士では使わない。もし入れるならばB1。	B2 妥当：	B2 妥当：普通に行う。
ベトナム語	妥当：普通に行う。相手と自分の距離を正しく規定する事ができる。難易度高し。	妥当：行う場合と、行わない場合がある。	妥当：難易度高し。相手と自分の距離を正しく規定する事ができる。政治的立ち位置にも。	妥当：普通に行う。相手と自分の距離を正しく規定する事ができる。政治的立ち位置にも。	？
マレーシア語	A2 妥当：普通に行う。普通に行う。呼びかけに反映される。称号が色々ある。	行わない。	使わない。	B2 妥当：普通に行う。	C2 妥当：手紙文。
カンボジア語	妥当：普通に行う。相手が僧侶や王族の場合や僧侶や王族を話題にする場合は、語彙が変わる。	個人差がある。	妥当：一部の語彙のみに限定。	妥当：普通に行う。	
ビルマ語	A2-B1 妥当：普通に行う。	？	A2-妥当：普通に行う。	B1-B2 妥当：普通に行う。	C2 妥当：必須、難易度高し

ベンガル語	A1-A2 妥当：ただし敬語のみ。二人称が3通りあり、自分より目上かどうかで、どの二人称を用いるかが異なる。それに伴い動詞の変化も異なる。	行わない（謙譲という発想はない）	通常ない。	通常ない。標準語ではないことになっているが、話し言葉は地域差が大きい。	A2 妥当：手紙文の書き方などで、若干はある。
ペルシア語	B1 以上妥当：使う。尊敬表現と謙譲表現、また多くの社交辞令や定型表現がある。相手との年齢差が大きい場合は、敬語表現が変わる。	A2-B1 妥当：特に男性が高頻度に使う。	それほど必要でない。それほど大きな違いはない。形態上の差異はないが、女性は謙譲表現よりも尊敬表現を使うことが多い印象。	A2 妥当：発音、動詞の短縮、語順、語彙等の点で大きく異なる。	B1-B2 妥当：手紙等で行う。
日本語	B2 妥当：普通に行うが難易度高し。年齢差よりも、社会的上下関係と親疎関係両方が文体使用に影響する。社会的関係が明確なときは使用。	B1 妥当：普通に行う。謙遜表現は必須項目。	B1 妥当：差が大きいので必須項目。	B2?妥当：非常に大きい。	定型表現を使えば良いが、、、
能力記述項目に入れるのは妥当か（まとめ）	妥当：難易度高い言語あり。	妥当：該当しない言語あり。	言語ごとに異なる。必ずしも必要ではない。	妥当：難易度高い。該当しない言語あり。	
CEFR レベル：A1～C2	A1,A2,B1,B2,	A1,A2,B1	A2,B1	A2,B1,B2	A2,B1,B2,C2
Descriptors（案）	「年齢差や社会的地位に応じて待遇年齢差や社会的地位に応じて待遇表現を使える」表現を使える」	「自分のことや食事などの招待時に謙遜表現を使える」	「男女差に対応した文体・語彙を使い分けられる」	「話し言葉と書き言葉とを使い分けられる」	「時候の挨拶文などの文章を書くことができる」

表2　社会関係が反映する文体差、待遇表現・謙遜表現などの言語行動

また日本語教育では、個人的関係の深い対話者間の会話で性差のある文体を学ぶのは一般的であるが、他のアジア諸語ではこの性差を重視する言語は多くないことが調査でわかった。「定量的分析」および「直感的分析」で問題にしたように、アジア諸語学習者は慣用的定形表現を適切に用いる書き言葉のコミュニケーション能力の低いことが目立ったが、言語教員を回答者にした本調査でも書き言葉の慣用表現には B から C2 レベルまであり、その難易度は極めて高かったことは注目に値する。

以上の定性的分析から、我々は新たな方法、すなわち EU の高等教育機関で用いる Diploma Supplement（学位記補足説明）を添付する事例を援用し、非ヨーロッパ

諸語へのCEFRの適用と運用に際しては、必要な場合には能力記述文に適切な社会・文化的「補足説明」を付加すれば、主要な問題は解決されるのではないかと着想するに至った。

4. 考察と展望

2016年3月に東京外国語大学で開催された国際シンポジウムで招聘講演を行ったBrian North氏によれば[9]、現在EU内部でCEFRの見直し作業が行われており、それもMediation機能を重視する方向で言語能力の再定義と測定方法を開発しているということである。ここでいうMediationとは異言語・文化間コミュニケーションに必須な「仲介、媒介行為」を含意する概念であるが、さらにMediationが単一の役割でなく、いくつかの相が複合的に概念化され、言語的仲介、教育的仲介などに加えて、文化的仲介（Cultural Mediation）、すなわち、他者や未知のものに対しての橋渡しをする（building bridges towards the new, the other）行為であるとしている。我々も、自分のものとは異なる文化・価値観へ向けて橋をかけるという知的作業自体、言語教育と言語学習の最も本質的で重要なものであるという認識には共感する。言語行動におけるコミュニケーション能力は個別の言語技能による伝達能力にとどまらず、異文化間に仲介として働くコミュニケーション能力（Intercultural Communicative Competence）の育成が必須条件として伴うからである。EUそしてCEFRの掲げる複言語・文化主義の実践は、複数言語の教育と学習行為を通じて、言語能力のみならず、他者と自己の相対的把握を可能にさせるものといえる。

最後に、第3章で示した定性的分析をふまえてCEFRの柔軟化と細分化（アジア諸語版の可能性）について現時点での判断を付記すると、アジア諸語の社会・文化的指標の多様性と非均質性をみれば、アジア諸語に適用可能な「ひとつの統合的」あるいは「下位グループ」のCEFR-Asia版を構想することは極めて困難であろう。そこで、非ヨーロッパ諸語に対するCEFRの運用には、EUの高等教育機関で学位記に採用されているDiploma Supplementの概念に近い、アジア諸語のそれぞれに認められる社会・文化的特質についての能力レベル付きの記述を必要に応じて能力記述文に添付する方法が有効ではないかと考えられる。程度の差はあれ、発話の社会・文化的コミュニケーション機能の基本的性質を考慮すれば、アジア諸国のみならず欧米にも共通な

---

[9] シンポジウムは科学研究費基盤研究(A)課題番号[24242017]（代表:投野由紀夫）「学習者コーパスによる英語CEFRレベル、基準特性の特定と活用に関する総合的研究」の主催による。

ものは多いことは予測できるし、EU 諸語を非母語・非母文化話者が学ぶ場合にも有用であろう、と期待される。本研究の次段階では、CEFR の能力記述文に添付しうる、学習対象言語ごとに適切な社会・文化的 Supplements を提案し発信することで、CEFR の適用可能性を拡げるための研究を展開したい。CEFR が EU 内部においても再構築されようとしている現在、我々の研究成果を EU にも還元させ、この共通の課題に少しでも回答の糸口を提供できれば幸いである。

（東京外国語大学・名誉教授、東京外国語大学・大学院博士前期課程）

参考文献

Byram, Michael; Lynne Parmenter, (ed.) (2012). *The Common European Framework of Reference – The Globalisation of Language Education Policy –*, Bristol.

Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment.* Cambridge University Press. (http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/cadre1_en.asp)

Halliday, M.A.K.; Ruqaiya Hasan (1885). *Language, context, and text: aspects of language in a social-semiotic perspective.* Oxford: Oxford University Press.

富盛伸夫 (2009).「ヨーロッパ連合（EU）における高等教育改編と言語教育政策の問題点について」,『外国語教育研究』, 外国語教育学会紀要 No.12, pp.101-114.

富盛伸夫 (2014).『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究 — 中間報告書 (2012-2013) — 』(科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 課題番号:24320104, 東京外国語大学)

富盛伸夫 (2015).『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究 – 成果報告書(2014) –』(科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 課題番号:24320104, 東京外国語大学)

富盛伸夫, YI Yeong-il (2016).「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題 －学習者アンケート調査 (2014) の分析から－」,『外国語教育研究』, 外国語教育学会紀要 No.19 (2016) pp.1-18.

結城健太郎 (2004).「D モジュール開発のための場面シラバスと機能シラバスに関する基礎調査」及び「D モジュールにおける機能 40 とその分類枠組み」,『言語情報学研究報告1 TUFS 言語モジュール』(川口裕司、芝野耕司、峯岸真琴編) 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報額拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.
(http://www.coelang.tufs.ac.jp/common/pdf/research_paper1.pdf)

*****

本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B）「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(2015 年度–2017 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 15H03224) の研究成果のひとつとして公開するものである。